学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
電話 03(3986)0221内線2607
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press/
press@gakushuin.ac.jp
発行・編集人　北岡恵子
年間500円

全学部で志願者減らす

平成17年度入学試験

文学部は減少著しく

平成十七年度の入試結果が発表された。全学部の志願者数の合計は、昨年度比六・二ポイント減。少子化に伴い志願者数は全国的に減少しており、もはや志願者数の五ポイント減程度はやむをえないとみられていた。このように、たしかに受験者数の減少が大前提となっている状況だが、本学は経済学部を除きとりわけ厳しい状況となったようだ。

平成17年度　学習院大学入試結果

平成17年4月1日現在

学部	学科	定員	志願者	合格者	倍率	入学者
法	法学科	250	2,440 (-437)	353 (-17)	6.9 (-0.9)	264 (-2)
	政治学科	230	1,474 (+110)	334 (+20)	4.4 (+0.1)	270 (+8)
	計	480	3,914 (-327)	687 (+3)	5.7 (-0.5)	534 (+6)
経済	経済学科	250	2,302 (+37)	507 (-5)	4.5 (+0.1)	254 (-23)
	経営学科	250	1,973 (-44)	292 (-73)	6.8 (+1.2)	254 (-17)
	計	500	4,275 (-7)	799 (-78)	5.4 (+0.5)	508 (-40)
文	哲学科	87	529 (-312)	159 (-27)	3.3 (-1.2)	106 (+13)
	史学科	85	847 (-157)	169 (-4)	5.0 (-0.8)	92 (-8)
	日本語日本文学科	110	872 (-139)	200 (-25)	4.4 (-0.1)	119 (-1)
	英米文学科	115	942 (+124)	238 (+37)	4.0 (-0.1)	119 (-15)
	ドイツ文学科	50	213 (-95)	78 (-4)	2.7 (-1.0)	53 (-6)
	フランス文学科	80	454 (+40)	122 (-5)	3.7 (+0.5)	79 (-7)
	心理学科	75	842 (+18)	144 (+2)	5.8 (+0.0)	82 (-6)
	計	602	4,699 (-521)	1,110 (-26)	4.2 (-0.4)	650 (-30)
理	物理学科	45	371 (-65)	122 (-1)	3.0 (-0.5)	41 (-15)
	化学科	45	540 (-2)	129 (+23)	4.2 (-0.9)	44 (-5)
	数学科	60	513 (-28)	127 (-3)	4.0 (-0.1)	59 (-2)
	計	150	1,424 (-95)	378 (+19)	3.8 (-0.5)	144 (-22)
合計		1,732	14,312 (-950)	2,974 (-82)	4.8 (-0.2)	1,836 (-86)

（　　）内は昨年度との比較。
入学者数には、「学習院高等科・学習院女子高等科からの進学」「指定校制推薦入学」「公募制推薦入学」「外国高等学校出身者および海外帰国生徒対象入試」「社会人入試」「外国人学生特別入試」による入学者を含んでいます。

まず注目すべきは地域別の志願者数である。本学は毎年、志願者数全体の七〇%強を一都三県が占める。その一都三県も今年度はそろって志願者数を減らした。中でも神奈川県は昨年度比九・六ポイント減と減少が顕著だ。

次に学部別に見ると、法学部は七・七ポイント減となった。政治学科は八・一ポイント増にもかかわらず、法学科が一五・二ポイント減と大幅に志願者を減らしたからだ。ロースクールブームの反動で全国的にも減少傾向だが、それを上回る形となった。

昨年度、両学科とも志願者を増やした経済学部は、〇・二ポイント減の微減にとどまった。ただし経済学科は二年連続で増加しており、健闘しているといえよう。

学部別で一番減少が著しかったのが文学部で、一〇・〇ポイント減であった。昨年度、志願者を増やした史学科、日本語日本文学科はともに大きく減少。逆に昨年度大幅に減った英米文学科は、一昨年並みまでは戻らなかったものの、増加に転じた。

昨年度大きく落ち込んだ理学部は、今年度も減少を続けた。特に物理学科は一四・九ポイント減と、ここ数年の全国的な「理系離れ」に歯止めがきかない状況だ。

こうした結果をふまえ、来年度入試への広報活動が早くも始まっている。広報活動の中心となるのがオープンキャンパスだ。その来場者の志願率が、本学は極めて高い。昨年十月開催時に訪れた受験生の志願率は七一・四%だった。それを受け、オープンキャンパスの広報に力を入れるとともに、昨年から始めた「ミニ講義」のさらなる充実を図る。

また高校主催の入試相談会への教職員派遣についても、受験生獲得の重点地区を従来の神奈川だけでなく、東京や千葉、埼玉にも広げたいとしている。今後、一都三県の志願者数をいかに安定確保できるかが重要課題となるからだ。さらに今年度、大学案内のDVDを作成した。一定の志願者が見込める高校に配布する予定だ。

そして受験生獲得に高い効果を発揮しているダイレクトメール。平成十三年度から実施しているが、昨年度は郵政公社主催の全日本ダイレクトメール大賞の公共等部門で金賞を受賞した。今年度はダイレクトメールにかわるものとして、電子メディア広報をより強化していく。

近年、AO入試など入試形態の多様化で、一般入試の受験生獲得がより困難になってきている。そのような中においても、本学はセンター試験の導入を来年度も行わない。単なる数集めではないという姿勢の表れだが、いかに多くの受験生に本学の魅力を伝えられるかがこれからの大きな課題として残る。

五年連続で就職率上昇

平成16年度就職状況

就職部より、平成十六年度の就職状況が発表された。四月二十五日現在の就職率は、男子九四・三%、女子九五・八%と、五年連続で女子が男子を上回っている。さらに全体では九五・一%と、こちらも五年連続での就職率上昇となった。

就職先を昨年度と比較すると、「銀行・信託」が八二人増と大幅に増え、「食料品」、「不動産」なども増加した。一方で、「電気機器」や「公務」が減少する結果に。また二桁採用者数は昨年度より二社増加し十一社となった。中でも、リクルートによる新四年生への就職希望企業ランキングで一位になった全日本空輸に、十三人（昨年度三人）が就職したことは特筆すべきことだろう。

長南就職部長は「各企業の採用増の追い風も受け、学生一人ひとりが必死に頑張った成果であると思う」と、今回の結果を高く評価している。年々就職セミナーへの関心も高まり、就職活動も早期化の傾向にある。そうした早めの行動が数字に表れた形となった。

今年度の見通しについて長南就職部長は、「楽観はできないが、足元の業績回復の影響などにより、平成十七年度も採用増は続くと思われる」と語る。また、従来の終身雇用制から欧米型のスキルやキャリアを積んでの自立・転職といった傾向も現れ始めてきた。今のうちから専門性を身につけることも大切なようだ。

しかしながら、「なかなか自分の進路を決められない学生も多く、まずは早期に進路についてじっくり考えることが必要だ。何か一つでも、他人に負けないというものに是非チャレンジを」と呼びかける。

就職部としては、一～三年生を対象としたキャリアアップセミナーや就職セミナーを随時開催している。これらに積極的に参加してほしい、とのことだ。なお、内定者数の上位企業は表の通り。

男子	
東京三菱銀行	9
みずほフィナンシャルグループ	8
警視庁	8
日本生命保険	6
ＵＦＪ銀行	6
横浜銀行	5
日本興亜損害保険	5
女子	
東京三菱銀行	34
三井住友海上火災保険	15
東京海上日動火災保険	15
みずほフィナンシャルグループ	14
日本生命保険	13
三井住友銀行	13
全日本空輸	13
三菱信託銀行	11
損害保険ジャパン	11

学習院 研究最前線

学問研究の「いま」

今回お伺いしたのは外国語教育研究センターの加藤耕義助教授です。ドイツの有名なメルヘン、グリム童話を専門としていらっしゃいます。グリム童話と昔話についてお聞きしました。

（取材・構成　小俣登糸美）

◇　◇　◇

グリム童話への道

高校時代、英語が苦手だったと語る先生は外国語科目でドイツ語を選択したかったと言う。残念ながらその希望は叶わなかったが、ドイツ語を学びたいという気持ちがドイツ文学科という進路へ繋がったそうだ。

「当時からクラシック音楽が好きで、部活もその関係の部に所属していました。ドイツと言えば多くの名作曲家がいて、みんな好きでしたね」

音楽に関心が強かった先生はどんなきっかけで、グリム童話に興味を持ったのだろう。

「グリム童話に魅力を見いだしたのは卒論のテーマを探していた頃です。短くて読みやすい、それに明るい内容がいい。また様々な切り口が可能で、非常に楽しいものだと思いました」

さて、グリム童話はご存知の通り、「ヤーコプとヴィルヘルムという名の兄弟が、ドイツに伝わる話を収集して、『子供と家庭のメルヘン集』として編纂したもの」だ。彼ら兄弟が童話を集めたのは何のためだったのだろうか。

「グリム童話研究とその魅力」

外国語研究センター　加藤耕義助教授

推敲の軌跡からの分析

「グリム童話が生まれた当時はロマン主義の時代。元々あった話から着想を得て、自分の文芸作品を作ることが多くありました。そうした流れの中で、グリム兄弟は民衆の間に伝わる元の物語にこそ、魅力があるのだと主張したのです。また、これらの物語をドイツの共通の財産として認識させようという意図もあったようですね」

書き換えの跡を探る

「赤頭巾」や「いばら姫」など、あまりにも有名な物語ばかりが収められ、現代にあっても色褪せないグリム童話。だが実のところ、その中身は初版に比べるとずいぶん異なるそうだ。その違いは誤りなどによるものではなく、グリム兄弟自身の推敲が重ねられた結果なのだと言う。

「グリム童話は初版から第七版まであります。現在一般に読まれているグリム童話は、最終稿の第七版です。再版の度に、いくつもの推敲が行われています。たとえば、残酷な話や性的な表現が削られる、同系統の話をまとめ直す、ということがされたのです」

それらの推敲の軌跡を辿ることで、グリム兄弟が意図したこと、さらに興味深い事実も見えてきたと語る。

「グリム童話は話し上手な人から聞いたものを集めたのが始まりですが、本から取ってきた話もあります。推敲の跡を見ていくと、書物からの再話は、その原話に創作的要素が強ければ強いほど、グリムの手が加えられていることが判明してきました。そして、グリムが度々手を入れている箇所については、グリム童話が日本語へ翻訳された際にも同じ箇所で揺れることがあったようなんです」

書き換えの変遷を辿るのは細かい作業だが、文章を実証的に解読することで、より鮮明に見えてくるものがあるようだ。

更なる観点を求めて

グリム童話の研究だからと、これに留まるだけではいつか行き詰まってしまう。そんなとき先生は、先輩の教授から周辺領域にも目を向けるよう勧められたと話す。その一手として日本の昔話とグリム童話との比較研究へも幅を広げた。この試みは日独の違いを際立たせるだけでなく、昔話の持つ特性の発見にも結びついているようだ。

「昔話は受け容れる人の文化を問わない、普遍的な要素を持ち合わせています。民間伝承研究全般に言えることですが、昔話や子供に語られた物語、伝記など歴史に書かれてこなかった人々の気持ち、その記録だと思うのです。これが何と言っても魅力なんでしょうね」

常に実証的な研究に努めている先生は、兄弟の理想が込められたグリム童話を幾つもの面から分析しようと、これからも試みていくのだろう。

PROFILE

加藤耕義（かとう・こうぎ）

本学文学部ドイツ文学科卒業、本大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学。本学文学部ドイツ文学科助手を経て、1998年、本学外国語教育研究センター講師、00年より現職。

先生の寄稿などが載る出版物

情報特急便

【役職】

学部長▼法学部長・井上寿一、経済学部長・杉田善弘、理学部長・藤原大輔

学科主任▼法学科主任・沖野眞巳、経済学科主任・脇坂明、経営学科主任・小山明宏、英米文学科主任・橋本槇矩、ドイツ文学科主任・大貫敦子、フランス文学科主任・吉田加南子、心理学科主任・篠原彰一、物理学科主任・川畑有郷、化学科主任・赤荻正樹、数学科主任・谷島賢二

専門職大学院研究科委員長▼法務研究科（法科大学院）・戸松秀典

大学院研究科委員長▼経済学研究科・川嶋辰彦、経営学研究科・青木幸弘、自然科学研究科・藤原大輔

施設等▼大学図書館長・荒川一郎、計算機センター所長・新居玄武、外国語教育研究センター所長・持田邦夫、大学史料館長・神田龍身、学生相談室長・小野太佳司

【昇格】

教授に昇格▼理学部・平野琢也、渡邉匡人、外国語教育研究センター・大澤顯浩

助教授に昇格▼理学部・井田大輔

【新任教員】

教授▼法学部・佐々木毅、文学部・中村生雄、上岡伸雄、高見健一、岡本順治、渡辺学、野村正人

特別客員教授▼経済学部・巽直樹

助教授▼法学部・大久保直樹、阪口功、中田喜万、経済学部・金田直之、文学部・FITZSIMONS, Andrew Joseph

講師▼法学部・村山健太郎

（敬称略）

戸山キャンパス

安全対策すすむ

今年度より、本院戸山キャンパスへ入構する際、セキュリティーチェックが行われることになった。授業・課外活動・図書館利用等の理由で本学学生が同キャンパスに入構する際にも必要になる。昨今学校において生じている事件等を受け、不審者の入構防止目的のセキュリティー強化だ。入構する際は同キャンパス守衛所で学生証を提示する。学生証の携帯を忘れた学生および本学卒業生は、同守衛所において記帳のうえ守衛等の指示により入構が可能。ただしこの場合、身分を証明できるものの提示を求められることがあるので注意が必要だ。

学生証は忘れずに携帯して行こう。

おことわり

今号の「素朴な疑問」は、お休みさせていただきます。次回は六月上旬発行の第一九七号に掲載予定です。

オール学習院の集い

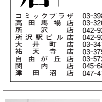
4月17日、第19回オール学習院の集いが本学で開催された。学習院の在学生やその父母、卒業生、教職員等関係者、近隣の方々も含め、多くの人が訪れた。

様々な模擬店や催し物が行われた中、法学部同窓会では本学OBの弁護士がニッポン放送株問題をテーマに講演し、大いに賑わった。大学生の姿は多くはなかったが、幅広い層の人たちと交流できる良い機会になっただろう。（隆）

明窓浄机

大学新聞社にも新入生が入ってきた。若いエネルギーに囲まれると、新しい気持ちで仕事に取りかかろうという思いが芽生えてくる。そしてまだ初々しい彼らを見て、私がまだ何もわからない一年生だったときのことを思い返す。つい最近入学した気がするのに、あっという間に三年生になってしまった▼毎年この時期になると、四月に決めた目標から遠のいてきて、堕落した生活に走ってしまう。「今年こそは頑張ろう」と毎年考えるのだが、いつも「思う」だけで終わってしまった▼確かに今まではそれでよかったかもしれない。しかし、今年度からは就職活動がある。大学生気分でいられるのも、自由な時間を使えるのも、あとわずかなのだ。にもかかわらず、いったい私は今まで何をして過ごしてきたのだろう。このまま何もしないで卒業するのは、あまりにも大学生活を無駄に過ごしてきた気がする▼時間に比較的余裕がある今、自分をよりよくするために資格を取り、自分を少しでも磨いていきたい。目的を持って何かにチャレンジすることは、これから充実した人生を送るために欠かせない条件だと思うからだ▼今からでもまだ遅くないはずだ。今年が「思う」だけだったかどうかは、来年の自分に評価を任せることにして、まずは第一歩を踏み出そう。（唯）

紙面紹介



2　特集・教職課程

知っているようで知らない教職課程。現在履修中の人へのアンケートや免許取得者インタビューを通し、その実態に迫った。

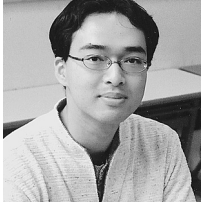
3　バイトのいろは教えます

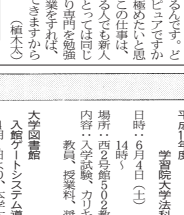
4　ハンドボールリーグ初戦制す

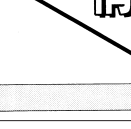
芸術のある風景

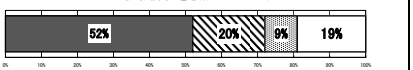
四月某日・靖国神社

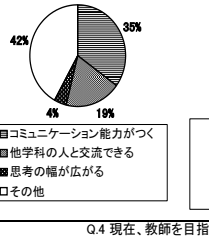
靖国の桜の始まりは明治三年、木戸孝允の植えたソメイヨシノによるという。現在その数は千を越え、春になると多くの人の目を楽しませている。（鳳）

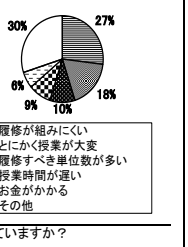












教職課程を知ろう！

教職課程は履修に要する条件が多い。しかし履修することで、それに見合った経験と資格の獲得が可能だ。またそれを学んでゆくことで、自身の視野が広がることもあるだろう。実際に教職課程を履修した方々に話を聞いてみた。

大学では、在学中に数多くの科目・課程を学ぶことができる。その中でも、教職課程は教員免許の取得に直結しているという特殊なものだ。

本学では教職免許を取得するには、卒業に必要な単位の他に特定の単位を五十九以上も取得しなければならない。その中身は、教員としての心構えを学ぶものや各教育科目における専門的な内容、実際に学校に出向いての教育実習などと、多岐に及んでいる。

数十年前まで、教職は就職先に困った人間が選ぶものといったイメージがあった。だが、近年では免許取得のハードルが高くなってきているらしい。教職課程の履修者自体は本学にも毎年多数いるものの、実際に免許状を手にするものはごくわずかだ。しかも、教職自体の枠も狭まっている。そのため、教職に対しての興味こそあれ、その過程の複雑さや条件の厳しさを前に断念している人も多いだろう。

本学の教職課程は学部・学科を問わずに履修が可能だ。大学卒業時には中学・高校の学科ごとに定められた科目の教員免許が取得できる。また、教職課程で学ぶことを通し、ディスカッション能力向上など、他ではあまり習得できないような技術を身につけることも可能だろう。

今号では、実際に履修している方や教員になった方へのインタビューをおこなった。それを基に、不明な点の多い教職課程について調べてみよう。

アンケートに見る教職のホンネ

本学の教職課程の事情はどのようなものだろう。同課程履修者を対象に、アンケートを行った。

当然ながら教職課程とは教員を目指す学生のためのものである。予想通り「教員になりたいから」と答えた学生は多かった。しかしここで注目したいのは「教員免許を取得したいから」という回答。これは単に教員志望ではなく、就職や将来の夢に備えて教員免許の取得を目指す学生がいるということだ。

学生は教職課程を履修している中で、多くのことを新たに考えるようになるという。アンケートでは、教育について考え直す機会を得たという意見が多かった。「教職課程が自己の成長の場になった」と答えた人も多い。

また履修後、教職課程に対する考え方は変わったという意見が目立つ。多くの学生が「自分で予想していたより大変、履修以前より真剣になった」と答えた。やはり教職課程を修了するまでには、多くの壁があるのだろう。教職課程を履修するには中途半端な覚悟では臨めないようだ。

教職課程を履修するメリットとして、大多数の学生は「自分が思っていることを他者に対して上手に伝えることが出来るようになった」と答えている。たまたま、教育方法の授業を見学させていただいた。このクラスはひとりの学生が他の学生を相手に授業をするというクラスであった。どの学生も工夫を凝らし、分かりやすく授業を展開しようと必死。このような課程は学生のコミュニケーション技術の向上につながっている。この技術は社会に出てからも、色々な場面で活かされるに違いない。

教職課程の改善点に対しては、カリキュラムへの指摘がほとんどを占めている。自分の専門学科の単位以外に五十九単位以上取得せねばならないことが学生の大きな負担になっているようだ。そのため、途中で履修を断念する学生も少なくない。

「今、実際に教師を目指していますか」という問いに対し七五％の学生がはいと答えた。いいえと答えた学生の中にはスクールカウンセラーや幼稚園教諭など、教育関連の仕事を中心に多岐に渡っている。中にはフライトアテンダントなど、一風変わった回答もあった。

アンケートには学生の真剣な意見が記入されていた。一人一人の教職課程に対する真面目でひたむきな姿勢が伝わってきた。本学から未来の教育界を担う人材が、数多く輩出されることを願う。

教職課程アンケート集計結果（本学教職課程履修者83人を対象に調査）

教師という仕事の魅力

これまで見てきたように、教職課程は通常の授業では学べないことを学べる、大変有意義なプログラムである。だが、やはり教職課程履修者である以上「本来の終着点」は、教師になることだと言えよう。しかし本学においては、大半の学生が一般企業に就職する。本学学生には、教師という進路は馴染みが薄いのが現状だ。

「同じ学習院の国文科（現日文科）で、実際教師になったのは、同期では三、四人でしたね」。そう話すのは、茨城県水戸市の私立茨城中・高等学校で、国語教師をしている熊山こずえさん（90年卒）。

今までに、多くの教え子を輩出してきた熊山さんだが、大学入学時には決して教師志望ではなかったという。「言葉が好きだったから、国文科に入ったんです。将来は、新聞記者などになって、言葉に携わりたいと思っていました。教職課程は、大学を卒業したひとつの証として、教員免許が欲しいから履修したんです」。

しかし、教職課程も終盤に差しかかったあるとき、熊山さんは教員になりたいと思うようになった。「母校に教育実習に行ったとき、大きな発見があったんです。教師というのは、日々同じことをやるものだと、そのときまで思ってました。でも、それは見当違いでした。朝と帰りで顔が違うように、生徒そのものが日々違うんです。生徒たちを育てるためには、毎日が真剣勝負なんですね。教師の投げかけひとつで、生徒の持っているものをプラスアルファにして引き出せます。奥が深いと思いました。それに、女子しかいない学校だからか、みんなが感受性豊かで楽しかったですね。そうやって、教育実習をしていくうちに、教師になりたいという思いに変わっていきました」。

その後、熊山さんは報道機関も数社受験したものの、教員採用を目指して就職活動をしていく。だが、教師への道は決して甘くはなかった。「教育実習が終わって、すぐに受けた茨城県の採用試験には落ちてしまいました。でも、私は教師になれるんだと、ずっと思っていました。そして、最終的には母校で常勤講師をやらせてもらうことになったんです。これは、『運命』としか言いようがないですね」。

それから現在に至るまで、生徒と向き合い続けてきた熊山さん。教師という職業について、インタビューの終わりにこう語ってくれた。「勉強のやり方にせよ、教えた以上に生徒に伝わることがあるんです。そういうときは逆に、生徒に教えられますね。まっすぐな高校生に会うと、自分自身が育てられるんです。どの子もみんなピュアですから。この道を極めたいと思っています。この仕事は、何十年やってる人でも新人でも、生徒にとっては同じです。しっかり専門を勉強して、いい授業をすれば、生徒はついてきますからね」。

（植木太）

教師人生を歩む熊山さん

経験者に聞く

本学の教職課程を卒業生はどう振り返るのか。渡辺芳将さん（科目等履修生・よしまさ）、梅北智子さん（カード会社勤務）に、それぞれの体験談を語っていただいた。

笑顔で体験談を語る渡辺さん（左）、梅北さん（右）

まず、教職課程で印象に残っている授業はありましたか、との質問に偶然二人とも川口幸宏教授の『道徳教育の研究』を挙げた。教授からテーマが出され、各班独自の方法で進めていく授業形式だ。渡辺さんが履修した年は「命について」という大きなテーマ。「いじめ」、「捨てられるペット」など、多種多様なアプローチで話し合われた。渡辺さんは、各個人がそれぞれ興味のある分野を調べ一冊の本を作り、それを読んで感じたことを議論し合おうと提案。「出来上がった本を基に議論し合い、とてもよい勉強になりました」。渡辺さんは、このような学生主導で作る授業やディベートを通じ、自分の哲学、倫理観を持てたと語っている。

教職課程を履修している学生は、通常大学四年六月頃に、数週間教育実習を経験する。そのときの体験を伺った。渡辺さんは、当初生徒との接し方に戸惑ったという。「高校生の頃のものの見方をつい忘れてしまっていたんです。だから『指示に従う生徒=良い生徒』という図式を勝手に作ってしまっていました」。教師としてのものの考え方を学ぶうちに、慣れない環境にいることもあってか、「教師の視点」からしか生徒を見られなかった。そのとき担当教員に、生徒の立場からの視点を思い出せという指摘をもらう。「相手の個性を受け入れ、相手の立場になって物事を考える。そして、教師としてそこから一歩進んで、叱ることを含めた様々なアドバイスをすることを実習で学びました」。大学の教職課程で培った自分の哲学、倫理観と目の前にいる生徒の気持ちを汲むこと。その兼ね合いの大切さを、身をもって教育実習で体験した。

一方、梅北さんは教育実習中に、「教える」ということについて深く学んだ。何かを伝えるときのアイコンタクト、間、話し方といった細かい技術ももちろん大事なことだが、気付いたのはもっと根本的なところだ。「人に何か伝えるということは、自分の中に表現したいことがあってはじめて出来る行為なんだということを学びました」。例えば、梅北さんの場合は、文章を読むときの楽しいという感情だ。印象的だった教師とは、根底にその教科の魅力を知り、それを伝えようとする人だったのではないか。「それは教える技術の少ない教育実習生でも持てるものなんです」。梅北さんは、「教師とは非常にやりがいがあり、素晴らしい職業」という感想を持って教育実習を終えた。一般学生は知識を一方的に吸収する毎日だが、知識を教えるという体験から学ぶのは、教職課程ならではだろう。

梅北さんは、現在就職しているが、教師になるという選択肢もまだ残している。すぐに教師を目指さない選択をしたのは、教師のモラルの低下から引き起こされる諸問題について考えてからだった。「それらは社会感覚の無さが原因ではないかと思いました。そこで学校という世界しか知らない教師になることに疑問を覚えたんです」。一度社会に出てから教師を目指すのでも遅くないのではないかと思い、決断した。

最後に学習院の教職課程の印象は、との質問に、二人とも「学生に考えさせる授業を行うことに力を注いでいる」ということを挙げた。教師として生徒と日常関わること、授業で教えること――。それらをするためには様々な議題を自ら考え、答えを出すことが不可欠だ。そして大学の講義で知識を蓄えながら、学生同士、生徒と、ときには昔の自分と向き合いながら理想の教師像を模索していく。

本学の教職課程で学ぶことは教師になるために必要であるのはもちろんのこと、ひとりの人間として学ばなければならないことではないか。インタビューを通して、そのような印象を持った。

（原泰一郎）

あの噂はほんと？

教職課程の履修者でも、一般企業への就職活動をする人は多いだろう。しかし、学生生活の中で「教職課程を履修していると、就職に不利になる」という噂を耳にすることがある。教員免許とは、あくまでも教師になる資格だ。そのため、企業によくない印象を与えるからかもしれない。

そこで、リクルートのリクナビ編集長橋本康嗣さん（やすし）にお話を伺った。「教員免許もひとつの資格です。何故取得したのか、その人なりの動機を説明すれば、不利になることはないでしょう。取得までのプロセスで得た経験や感じたことが実になっているのであれば、むしろ評価してくれることもありますよ」。そして、履修者へのメッセージとして「教職課程の中で得た経験から何を学習したのかをしっかりアピールすることが大切です」と付け加えた。

最後に橋本さんは、就職戦線を勝ち抜くためにもっとも必要な能力として、「コミュニケーション能力」を挙げてくれた。もちろん教職課程では、教育実習などを通して、大いにそれを磨くことができる。教職課程はむしろ、一般企業への就職にも非常に役立つプログラムなのではないだろうか。

（植木太）

就職を語る橋本さん

記者の眼

日本列島を襲うスギ花粉

花粉症。春が来るたびに毎日どこかで耳にする単語だ。周知の通り、花粉によって引き起こされるアレルギー症状は個人差があるものの、基本的にくしゃみ、鼻水、目のかゆみをなどを伴う。なかでもスギ花粉は、現在国民の一割を超える患者を悩ませていて、社会的問題ともなってる。

先日、新聞で「現在、花粉が日本列島を高度四八〇〇メートルの上空から、ドーム状に包み込んでいる」という記事を読んだ。四八〇〇メートルといえば富士山よりも高い。花粉症でない人には何でもないことだが、花粉症患者にはこの上ない恐怖である。列島上にそんなに花粉があったら、いくら吸ってもなくならない。このままでは春先だけでなく一年中花粉症、などということになりかねない。そんな不安さえ感じる。

スギ花粉が蔓延するようになったのにはわけがある。スギは元来日本に天然分布していて、生育が早いこと、幹がまっすぐであること、そして加工のしやすさから、重宝されてきた。戦中には軍用資材、戦後には戦災復興のため大量伐採されたが、伐採後の水害の心配や、後の経済発達の木材需要のため造林が推進された。こうしてスギの木は激増していった。しかし、海外からの輸入木材により、次第に国内の材木需要は減少していく。そして国内の植林は手入れがされない状態となり、現在のように過剰に花粉を飛ばすようになったのだ。

最近、花粉症は公害か、環境問題か、ということがよく問題にあがる。花粉症患者に言わせれば、公害だという意見は少なくない。私も同様に公害だと考える。経済発達のために発生した弊害は公害のほかの何ものでもない。また、スギは二酸化炭素の吸収量が他の木に比べ多い樹木である。日本に植生している大量のスギの木が地球温暖化防止に一役買っているのに、環境問題だということはないだろう。

国としては、スギを花粉の少ない品種に改良したり、樹木を徐々に伐採しているそうだ。しかし、ただ花粉があるから花粉症が発症するわけではない。特に都市部ではコンクリートの地面での花粉の跳ね返り、また、大気汚染との関係があるとも言われている。花粉はもう単純な対策では手遅れになってしまっているのだ。花粉の発生源を考えるのも大切だとは思うが、そろそろ本格的にもっと広い目で花粉症対策をしていかなくてはいけないのではないだろうか。

（フランス文学科3年　長谷川さよ）

日本人が失った思いやり

ゼミの時間にOGが自分の経験を語る機会があった。その女性はオーストラリアの過疎地で教師として数ヶ月間駐在し、日本について教えていたそうだ。そのとき、ホームステイ先で、十歳の男の子の部屋を借りることになった。そのせいで男の子は違う部屋に移動することになってしまったのである。

そして彼女が帰国する日。男の子は「この部屋を大事に使ってくれてありがとう」と言って彼女を見送った。本来なら自分の部屋を奪われたのだから、嫌味のひとつでも言いたくなっただろう。しかし十歳の子供であるにもかかわらず、自分の感情をむき出しにすることなく、相手への配慮をとった。日本の十歳の子供、いや大人でもこの男の子と同じ行動をとることができないかもしれない。

現在新聞の三面記事を飾るほとんどの事件が、感情をうまくコントロールできなかったことによるものだ。また、事件にまで発展しなくとも、日常生活において同様の原因でトラブルが発生することは少なくない。これはかつて日本人の持っていた、他人への思いやりが失われてきてしまっているのではないか。

日本のようにモノに溢れている国の人間は自分が贅沢だということに気づかなくなる。やがてそれが国全体に広がると、国として成立しなくなるという。というのは、このような国はモノがたくさんあるので自由に取捨選択できる。それは自分が嫌なものを排除し、自分の好きなものに囲まれて生活することを意味する。人はどうしても楽な方へと行きたがるのだ。誰だって苦しいことは避けたいものだろう。しかしそれを耐えてつらさを乗り越え、成長していくのが人間だ。もし少しの我慢をすればうまくいくものを、耐えることができなくなれば、本当に我慢しなければいけないときにそれができなくなってしまう。

昨年起きた佐世保女児殺害事件は、我慢する力をなくした子供の例の象徴だろう。自分が言いたいことを言い、やりたいことをすれば、相手のことを何も考えなくていいのだろうか。そんなことはないはずだ。自分の感情をうまくコントロールして、相手への気遣いをすることは、円滑な人間関係をつくっていく上でも、また近代人として生きていく上でも必要なことではないだろうか。

（経営学科3年　安孫子友香）

編集後記

今回、教師なら誰でも通る道である「教職課程」を特集した。当初、「どのようなメリット、デメリットがあるのか」という視点で取材を始めた。何も知らない人に説明するのに興味が持ちやすいと思ったからだ。しかし少数ではあるが、熱意を持ってその時間を過ごした人に触れ、方向転換した。彼らは教職を前述のような基準で見ていないし、傍からみると困難なことでも、それを立ち止まる要因として見ていない。教師になるという目標が定まっているため、どのようにしたらそれを乗り越えられるかを考え、行動をとっているのだ。

教師は生徒と日常を共にしながら、自らの考えを伝え、共有する職業だ。だからこそ自らを向上させるため、教職課程の講義や教育実習を充実したものにしようとしている。その姿勢は、将来彼らに学ぶ生徒にとって大変望ましいことだろう。

誰もが出会う教師。その存在は、生徒の一生に大きな影響を及ぼすこともある。その職業を目指す真剣さが心地よかった。

（原泰一郎）

企画　植木　太
構成　柳川香里
レイアウト
　　　原泰一郎
取材　小倉正也
　　　森谷直樹

情報特急便

情報コーナー

就職のための
キャリアアップセミナー（2）
「悔いのない学生生活を送るために」
講師：佐藤孝治氏
（ジョブウェブ社長）
「就職に役立つ資格習得について」
日時：5月13日（金）
18時～（1時間半）
場所：西5号館B1教室
参加費：無料
備考：新1年生から新3年生対象

就職のための
キャリアアップセミナー（3）
「適性・適職テスト」
日時：5月25日（水）
18時～19時20分
場所：西5号館B1教室、201教室
参加費：1000円
受付：5月13日（金）～18日（水）
（日曜日を除く）
9時～16時
（14日（土）は12時まで）
北1号館1階就職部カウンターにて、13日より申込み要綱を配布。参加費を払い、申込み要綱の半券を受け取る。当日、半券を持参すること

学部・学科

備考：新1年生から新3年生及び、大学院生対象
先着500名

平成18年度
学習院大学法科大学院説明会
日時：6月4日（土）
14時～
場所：西2号館502教室
内容：入学試験、カリキュラム、担当教員、授業料、奨学金、その他

大学図書館
入館ゲートシステム導入のお知らせ
4月1日より、本学大学図書館へ入館する際には、学生証あるいは図書館利用証が必要になった。入り口のゲートはこれまでと同様の2ヶ所。カードを機械に読み取らせ、緑のランプが点灯すれば、ロックが解除され、手動でゲートを押し入館することができる。もしも赤のランプが点灯したときは、もう一度カードを読み取らせてみること。それでも、ロックが解除されない場合は図書館職員に声をかけ、事情を説明するのがいいだろう。

いろいろあるある アルバイト

大学生のほとんどが経験したことのあるアルバイト。多かれ少なかれ、生活の一部に深く入りこんでいるのは間違いない。今回は、そんなアルバイトにスポットを当ててみた。

本学学生のアルバイト事情はどのようなものなのか。アンケートから、アルバイトに関しての実情や本音が見えてきた。

学生の九割近くは現在アルバイトをしている、もしくは過去に経験があると答えている。やはり学生とアルバイトは切っても切り離せない関係にあるようだ。今までにいくつアルバイトをしたか、という質問には二つ〜三つと答えた人が五割にも上った。これは、いくつかのアルバイトを経験して自分に合う仕事を探す人が多いということだろう。また、二割弱の人は一つと答えている。三年生や四年生で一つと答えた人もいて、長期のアルバイトをしている人も少なくない。その一方で十以上という回答も見られ、二十という強者もいた。

バイト先の業種としては家庭教師や、塾講師がかなりの割合を占めている。その他には、レストラン、飲食店や、アルバイトとして定番のコンビニなどが続く。珍しいアルバイトとして、テレビのエキストラをしているといった答えもあった。このように様々なバイト先の中から選ぶとき、学生はどのようなポイントを重視しているのだろう。最も多かったのはやはり「時給のよさ」。次いで「家から近くて通いやすい場所」という意見が多かった。また「興味がある仕事だから時給が低くても気にしない」といったように、自分に合った仕事を見つけている人もいた。

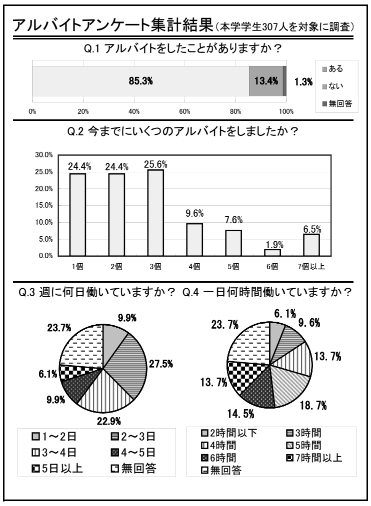
では、一週間でアルバイトに割く時間はどれくらいなのだろうか。アンケートを見てみると週二〜三日、一日五時間前後が平均となっているが、中には週五日以上、一日七時間といった人もいる。しかし、そのような人はごく少数で、大学生活に支障がない程度にアルバイトをこなしている人がほとんどのようだ。

そんなアルバイトで稼いだ給料の主な使い道を聞いてみた。食事代、携帯代など十人十色といった結果になったが、気になったのは「貯金している」といった意見が意外にも多かったこと。将来に向けて、という人が多いのは今の時代を反映しているようにも思える。貯金の目的として「免許を取るため」といった身近な目標をあげる人が多かった。

最後に「現在のアルバイトに満足しているか」という質問に対しては、満足している人と不満のある人ではっきりと差が出た。満足している理由としては「仕事をしていて楽しい」「楽な仕事なのに時給がいい」の意見が圧倒的。一方で不満がある理由は「帰りが遅い」「仕事のつらさに時給が見合っていない」といった具体的なものが多かった。さらには「やめたいけどやめさせてくれない」といった切実な問題を抱えている人もいるようだ。おもしろいのは、どちらの意見の人にも共通して「職場の雰囲気と人間関係」があげられていた点。満足していると答えた人たちは「バイト仲間や従業員がいい人たちで仕事場の雰囲気がいい」という理由をあげる人が多い。逆に、不満があると答えた人たちは「店長と反りが合わない」「人使いが荒い」といった理由をあげている。アルバイト先に限ったことではないが、やはり人間関係は重要な要素といえるだろう。

自由な時間の多い大学生。アンケート結果を見ると、アルバイトをお金稼ぎの手段として捉えている人が多いのが現実だ。しかし「仕事をしていく上で様々なことを学べる」といったように、その経験を通して自分にプラスになることも少なくない。時給が安いと嘆いている人は、アルバイトをそんな社会勉強の一環だと考えてみるのはどうだろう。（新原大輔）

アルバイトアンケート集計結果（本学学生307人を対象に調査）



バイト探しに迷っちゃう

バイトを始めるには何が必要だろう。やる気? 履歴書? 確かにそれも必要だ。だがどんな働き口があるかは、調べてみなければ分からない。そこでまず、バイト探しの情報を集めてみよう。

情報といっても、最近は選ぶにも大変なほどの種類がある。紙の媒体だと日曜版広告、無料・有料のバイト情報誌、店の張り紙など。電子媒体ではパソコンや携帯から見られる求人サイトなどがある。自分にあった形態を探すにはどれを利用すればよいのだろうか。

まず紙媒体は、提供する側が情報を分類したものを受け手が選ぶ、受け身な形態だ。中でも多くの人が目にする無料バイト情報誌や広告は、地元密着が主である。自宅近辺で仕事を探す人にはもってこいな半面、掲載店数は多くない。短期、学生歓迎などの特集で多少条件が絞れるものの、自分に合ったものを探すには時間がかかる。

その点、有料バイト情報誌は広範の情報が載っている。細分化もされているので情報量も無料のものに比べ約十倍以上だ。さらに求人情報以外にもテレビ欄が載っていたりと、内容も充実している。ただ、広範であるため、不要な情報が多いというデメリットもある。また情報誌自体にも種類があるので、見比べて自分に適した職種が多く載ったものを選ぼう。

それに対してインターネットでは、自分で条件を絞って選べる。例えば地域、期間、職種などを総合して検索できる。地図も掲載されることが多く、紙の媒体以上の情報を得ることができる。さらにその場で応募シートを送り、そのまま面接へと進むことも可能だ。

携帯サイトでも同じことがいえるが、小さい画面で多くの情報を見ていくのは時間もかかる。電車を待っている時間などに探すには良いが、じっくり探したい人にはパソコンで検索することをおすすめする。

ここで気をつけるのは、友人の紹介によるバイトである。紹介は受かりやすく、前もって職場の雰囲気も知ることができる。しかし条件が違ったなどトラブルの元になるケースもあるので、自分自身で必ず雇用先にも確認をとっていただきたい。

周囲を見ても、学内ではまだ紙媒体を使ったバイト探しが多いように感じられる。しかし電子媒体も気軽さは同じだし、大手なら安全な上に探しやすいのでこれから注目してみてほしい。さあ、いろいろな情報源を参考にして自分にぴったりの仕事を探してみよう!（山田絵美）


情報源を選ぶのはあなた自身

みんなで語ろう バイトの旨味

一口にアルバイトといっても、儲かるバイト、やりがいのあるバイト、楽なバイトと様々。本学学生は一体どんなバイトを選んでいるのか。

A男「みんなどうして今のバイトを選んだの?」

B男「僕は塾の講師をしているけど、時給八〇〇円で立ちっぱなしの仕事なんてやる気が起きないでしょ? だから座って出来ることを条件に探したんだ」

C子「私は映画が好きだから、関われる仕事がしたくて映画館で受付をしているの。好きだからこそ続けられるのよね」

D男「僕は放課後部活があるから、朝に仕事ができるコンビニにしたんだ」

A男「僕はどうしてもバイトをする気にならないな。一人暮らしだから生活費をやりくりすれば十分だし、授業の予習する時間を割くのも嫌なんだ。バイトでなきゃ得られない経験とかってあるのかな?」

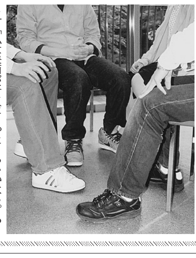
B男「僕の場合、子供と接する仕事だから等身大の今の子供が見えてよかったな」

D男「謝り方が上手くなったくらいかなぁ。あとどんなことをしたら怒られるのかだんだん察することが出来るようになったから、世渡り上手になれたかもしれない」

A男「C子は? 映画館のバイトを一年以上も続けているみたいだけど?」

C子「時給は高くないんだけど、映画がただで観れたり特典も多いの。でも映画が好きな人と一緒に働いて、趣味の話が出来るってことが大きいかな?」

A男「職場が楽しいのは大きな魅力だね。好きなことを探せる友達を見つけるために、興味のある業種で働くのもアリかもね」（加藤亜祐美）



通勤0分のバイト

本学学生にとって一番身近なバイトとはなんだろう。そう、それは学内バイトである。

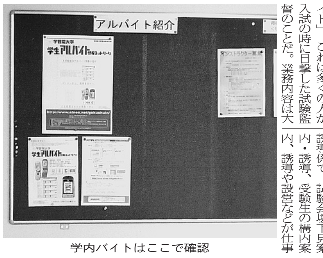
まずは「入学試験アルバイト」。これは多くの人が入試の時に目撃した試験監督のことだ。業務内容は大きく二つに分かれている。一つは監督補助員で、試験場の点検、試験監督や問題冊子・解答用紙の配布と回収を行う。もう一つは案内誘導係で、試験会場下見案内・誘導、受験生の構内案内、誘導や設営などが仕事だ。学内を熟知している我々学部生にとっては簡単な仕事だろう。

一番気になる日給は七三〇〇円。時給換算すると約八六〇円と高くはないが、業務内容が楽な上に昼食つきと、なかなかおいしいバイトである。応募条件も厳しくないので就労希望者も多いだろう。

しかし、毎年人気があり先着順で受け付けるので、早めに申し込む必要がある。絶対にやりたいと思う人は、学生部からの情報に細心の注意を払って欲しい。

続いて「計算機センターインストラクター」。これは情報処理の授業などで先生の補助や授業の準備をしている人のことだ。業務内容はパソコン実習指導補助と情報処理教育に関わる諸雑務で、時給は八〇〇円。募集対象は教導教官の許可を得た物理学科・化学科の四年生・院生としている。応募条件は計算機センターが出す条件のいずれかを満たさなければならない。この条件は機械音痴の学生には辛い条件かもしれないが、パソコンの腕に自信のある学生にとってはそれほど難しいものではないだろう。

学生部では、ここで紹介した他にも東洋文化研究所の所蔵資料閲覧の受付や、TOEIC試験会場への誘導、試験官補助業務など、さまざまな学内で出来るバイトを紹介している。自分好みのバイトが見つからなくて困っている人は、学生部へ足を運んでみると良いだろう。（掛川千尋）



学内バイトはここで確認

取材・構成
掛川　千尋
加藤　亜祐美
河野　雅子
新原　大輔
山田　絵美

あの頃 私も若かった⑤

法学部政治学科　**遠藤　薫教授**

守る大切さ 変える大切さ

今回お話ししていただいたのは政治学科の遠藤薫教授。一体どのような失敗談を語ってくれるのでしょうか。


23歳の頃

本当の勉強とは

私が思い出す失敗談というのは、小学校六年生での出来事ですね。先生が言った「勉強というのは人から言われてやるものじゃない。自分で考え、自分で問題を見つけ、自分で解決する。それが本当の勉強なんだ」という言葉に感動し、どうやったらそんなことができるのか友達と話し合ったんです。それで教室にいても本当の勉強はできないんじゃないかという話になって、ある日学校を抜け出してしまったんですよ。自分たちは何も悪いことをしているという意識はなかったんですが、学校の方ではやっぱり騒ぎになっていたようです。私たちとしては先生の言ったことを実行して、喜んでもらおうとしただけだったんですけどね。戻った後に抜け出した理由を話したら、怒るにも怒れない様子でした。あの時は図らずも先生を困らせてしまいましたね。

ルールに対する意識

この出来事を通して思ったのは、ルールについての問題。模範的な学生ほどルールに縛られすぎるといった傾向がありますが、それだけではいけないと思うんです。規則に自分の考えを押さえ込まれてしまうのはもったいないじゃないですか。ルールを守るのは大切なことですが、同時にそれは不変のものではなく、変えられるものだということを知ってほしい。もちろん自分勝手に変えてしまうのはダメです。自分の考えと他の人の考えを擦り合わせることでより良いルールを創っていける、破るのではなく改善することができるという意識を学生たちには常に持っていてほしいと思いますね。

（取材・構成　新原大輔）


現在の遠藤教授

PROFILE

東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了。博士(学術)。専門は社会学(社会情報論)。主著に『電子社会論』『インターネットと〈世論〉形成』などがある。

映画

リンダリンダリンダ

監督　山下敦弘
出演　ペ・ドゥナ／前田亜季／香椎由宇／関根史織
2005年／日本／114分
配給　ビターズ・エンド

文化祭、バンド、ブルーハーツ。この三つの単語だけで、心の琴線にふれる人は少なくないはずだ。この映画はそんな人々にまさにうってつけの青春映画である。そしてまた、無気力で「普通」の青春時代を送った人にも、観てもらいたい映画だ。

この物語の主役は、高校生活最後の文化祭三日前にメンバーが抜け、空中分解寸前となったガールズバンド。意気消沈するドラムの響子（前田亜季）、キーボード転じてギターの恵（香椎由宇）、ベースの望（関根史織）は、ひょんなことからブルーハーツのコピーをやることに。そして、なぜかボーカルにむかえたのは、韓国からの留学生・ソン（ペ・ドゥナ）だった。

監督の卓越したコメディセンスは十二分に発揮されているし、出演者は地に足のついた演技力で「演技をしている」という違和感を覚えさせない。また大作『ローレライ』で無口なヒロインを演じた香椎由宇が、怒りっぽくて気分屋の役を見事に演じきっている。

青春映画といえば、熱さと衝動と物悲しさ。この作品ももちろん、その要素がたっぷり入っている。迫力のバンドシーンや、青春時代ならではの人間関係のいざこざをしっかり描いているところは、まさに正統派青春映画と言えるだろう。

しかしそれ以上にこの映画の魅力は、ひたすら「普通」であることだ。劇的なことも起こらず、くだらないことを言って笑い、たまに真面目にもなってみたあの頃。それが誇張されず、そのまま描き出されている。監督はこう言っている。「自分の思う高校生はこれ以上でもないし、これ以下でもないんだよな、と思った」。

そう、感情移入するまでもなく、これが私たちの高校時代だった。だからこそ、この映画は誰にとっても観る価値があるのだ。（河野雅子）


'05夏休み、シネセゾン渋谷ほかで公開

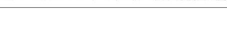
CAMPUS GUIDE

● 音楽部
「第44回定期演奏会」
日時：5月21日
場所：パルテノン多摩
料金：900円
内容：6時開演です。「英雄」をやります。

● シェイクスピア・ドラマ・ソサエティ
「第51回本公演 Together Again
〜ゴッホからの最後の手紙〜」
日時：5月27日〜29日
場所：新宿シアターモリエール
料金：500円
内容：ゴーギャンとの再会を遂げたゴッホの得た答えとは?

● 能楽研究会
「宝春会」
日時：5月29日
場所：銀座能楽堂
料金：無料
内容：全部員60人の謡と仕舞のオンパレード。幽玄の世界に浸れることまちがいなしです。

● フランス会部
「公演」
日時：6月3日
場所：富士見ホール
料金：無料
内容：みんなを爆笑の渦に巻き込みます。



御礼

ご協力ありがとうございました

今回の編集作業において多くの皆様にアンケートのご協力をいただきました。

皆様のご意見を参考に、紙面を構成させていただきました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

学習院大学新聞社
黎明会館316号室 3986-0221（内線2607）
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press

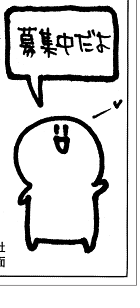
社告

CAMPUS GUIDE

キャンパスガイド募集のお知らせ

キャンパスガイドでは学内外で行われるサークルのイベントを紹介していきます。

多くの学生が目を通す大学新聞にあなたのサークルの情報を載せてみませんか？



学習院大学新聞社
3面

開幕戦、白星で飾る

ハンドボール同好会

立教大を封じ込める

目の前のボールを奪取しようと、相手と競い合う小菅選手（左）

4月17日、関東学生ハンドボール連盟春季リーグが開幕した。現在5部の本学は、立教大学体育館にて同大相手に30—18で快勝した。揺るぎないディフェンス、激しい速攻を武器に、本学選手たちの勢いある、かつ正確なプレーが光った。昨年のリーグ戦では最終戦を落とし、惜しくも4部昇格の道が閉ざされてしまった本学にとって、この立教大戦を勝利で収めたことはこの上ないスタートとなった。

「全体的に良い試合内容でした。ミスからもすぐ修正ができ、効果的に得点が取れました」と石橋知主将（済4・さとし）は試合後満足げに語った。

試合開始直後、両校一歩も譲らない激しい攻防が繰り広げられた。そんななか、前半1分。まず先制ゴールを決めたのは、本学期待のルーキー、阿部豪幸選手（法1・たけゆき）だった。そのスピード感溢れるプレーは今後の試合展開を変えるかのような動きであった。そして阿部選手のゴール後、両校の攻防はさらに激しさを増す。

点を取っては取り返すという試合展開が続いていた前半10分。5—5の同点から本学がゴールをたてつづけに決め、立教大を突き放し始める。特に石橋主将を中心としたゴールへつながるパス回しが多く見られた。また、チームのキーマンである小菅啓介選手（済2・こすが）の速攻が、本学の大量得点への機軸を作り出す。

「立教大は守備から速攻を持ち味としている。本学と似通ったチームだが、実力の差が本学を優勢にした」と石橋主将は前半をこう振り返る。

後半も本学の勢いが途切れることはなかった。後半開始1分、石橋主将がゴールを決め先制。さらに3分過ぎには庄山正義選手（営3）が連続して2ゴールを挙げ、さらに相手を引き離す。その直後、前半大活躍をみせた小菅選手がペナルティスローを確実に決めた。そして、持ち味の速攻を十分に活かし、本学の勢いは一向に増す。小菅選手は「チームの中で自分が一番経験豊富。他の部員より試合慣れしているので、その分必死にやりました」と語る。また、守備の面では、ゴールキーパーの赤堀慧選手（済3・けい）が好セーブを連発し、なかなか相手に自陣のゴールネットを揺らさせない。

後半15分過ぎ、本学に疲れがみえはじめ、ミスから3連続ゴールを許してしまう。しかし、その後も本学優勢の流れは変わらず、すぐに取り返す。試合終了まで本学は安定した試合展開を送り、小菅選手を筆頭に着実に得点を加算。気がつけば12点差、30—18で、本学の圧勝であった。

試合後、石橋主将は「今日は特に小菅の速攻が良く、期待に応えてくれた。しかし本学の欠点は体力不足と部員不足。リーグ戦半ばがつらいだろう」と少しばかり厳しい表情も見せた。しかし、その陰からは勝利に対する笑みもうかがえた。

初戦を良い形で終えた本学。しかし戦いは始まったばかりだ。まだ同好会という位置づけのハンドボール同好会。今回のような勝利を重ねることによって、部員期待の部会への昇格が近づいてくるだろう。今後の活躍にも目が離せない。

（佐藤貴裕）

2部昇格へ好発進

フェンシング部男子

相手に攻めこむ三内選手（左）

4月16日、駒沢屋内球技場で関東学生リーグ戦フルーレ部門が行われた。本学にとっては2部昇格を懸けた試合である。

第1試合は対戦相手である東京外語大が棄権したために不戦勝となり、本学最初の相手は第2試合の国士舘大となった。同大戦は本学の力が大いに発揮できた試合であった。

1番手の佐々木謙一主将（済4）は先制点を奪うも自分のペースに持ち込めず、なかなかポイントを連取することができない。だが、今大会では「落ち着いて、自分の力を出せば勝てる」ということを強く意識していた佐々木主将。相手の攻撃をいなし、フェイントを織り交ぜた巧みな剣さばきをみせる。そして5—3で三内崇正選手（物2）につないだ。

ところが三内選手は強引に攻めてくる相手に先制点を許してしまう。その後は両者とも点を奪えない硬直状態となってしまった。しかし、三内選手は鋭い一突きで流れを呼び寄せる。その後あっという間にポイントを重ね、10—5。3番手、上野謙選手（法3）の出番となった。

上野選手は持ち前のフットワークでテンポよく突きを繰り出す。相手の反撃を制し、15—7で再び三内選手へつなげた。

2周目以降も本学は勢いにのって3人で連続13ポイントを奪い、場内はヒートアップ。相手を全く寄せ付けない。そして、多彩な攻撃を終始続けた本学が45—15と完勝した。

続く第3試合は、今リーグのライバル校である防衛大。相手は豊富な運動量をみせるが、本学は動揺することなく落ち着いて試合を運ぶ。そして今大会での主な作戦であったカウンターを多用、常に攻撃の姿勢で次々とポイントを加算。一気に点差を広げる。本学が18—1と圧倒すると、相手校は焦りから前へ前へと突進。それを冷静にかわしカウンターを繰り出した。

本学の一方的な展開だったが、中盤、状況は荒れ始める。22—2、このまま終わらせるわけにはいかないと言わんばかりに、防衛大が上野選手を攻めたてた。一突き浴びせる度に雄叫びをあげ己を奮い立てる。しかし、本学は気圧されることなく粘り強い攻撃を続ける。そして、相手の間隙を縫う一撃。歓声が鳴り響いた。45—19と完勝で、2部昇格へ向け最良のスタートとなった。

「自分たちはまだまだ成長します」。そう言いきる佐々木主将の自信に満ち溢れた顔が、まだまだ続く快進撃を予感させた。

（山崎晃志）

Replay

ウェイトトレーニング同好会主将

山口倫太郎さん（哲3）

心身ともに鍛える

スポーツの大会はまさに多種多様だ。たとえば、ボディビルの学生大会の場合、予選を通過した選手20名のみフリーポーズをとることができる。フリーポーズとは、選手自身が選曲したBGMに合わせて、ステージで思い思いのポーズをとり、己の鍛え上げた肉体を披露することだ。これらは「いかに肉体を美しく見せるか」に終始しており、その観点からすれば芸術といえよう。しかし、先にも述べたように、この夢のステージに立つためには、予選を通過しなければならない。

山口主将は昨年、2年生の6月に10月の大会に向けて減量を始めた。自ら本を購入し、栄養学を学び、脂肪だけを落とすためのヒントを得た。しかし減量とトレーニングとの並行は厳しく、苦労の末20kg減量したが、大会当日に疲労は極限に及んだ。そのため、予選の段階で弱気になってしまった。だが山口主将はそれを「未熟さの表れ」と冷静に分析し、力をふりしぼった。それが功を奏し、大会初出場ながらも見事予選を通過した。「これまでの努力が報われて、うれしかったです。次に行われるフリーポーズもがんばろう、楽しんでやろうと思いました」。

そして迎えたフリーポーズ。「終わった時は他大学の選手も温かい拍手を送ってくれました。自分がやってきたことを見てもらえたのでしょう」と懐かしそうに振り返る。

関東大会15位、全日本大会19位と山口さんの結果は好成績だった。成果を出せたことの喜びは大きいようだ。

ウェイトトレーニング同好会が取り組んでいるパワーリフティング、ボディビルディングは、いずれも個人の努力がものを言う。鍛えれば鍛えるほど、高重量を持ち上げるほど、自分に出会い、進化した肉体を目の当たりにすることができる。そのため、ライバルは自分だと言う選手も少なくない。山口主将もそのひとりだ。「パワーリフティングもボディビルも個の力をつけることができるスポーツです。このスポーツによって今の自分を超え、自分を高めていきたいですね」と、このスポーツの魅力と今後の抱負を熱く語ってくれた。

（中谷美穂）

初戦突破ならず

ボウリング同好会

ストライクを狙う岡嶋選手

球が手を離れ、頭の中で思い描いたように流れていく。——ストライク。

4月17日、マルアイボウリング場で第44回関東学生春季リーグ戦が開幕した。この日、本学は1部リーグ昇格後の初の団体戦となる。出場者は伊藤瑞湖選手（日4・すいご）、岡嶋佑樹選手（英3）、一江拓生選手（済3・ひろなり）、小林亮一選手（法2）、小田島創選手（哲2・そう）の5人。対する相手は東海大学で、1部に昇格したばかりだが、5人で合計スコアを約900ポイント叩き出す強豪校だ。

初戦で緊張したのか、第1ゲームは730—856と思うようにスコアが伸びない。続く第2ゲームは気持ちを切り替えて挑むも、プレッシャーからか焦りが滲み出る。そして結果は802—840と、ついに勝利を掴むことは叶わなかった。

この時点で勝敗は決したが「1ゲームでも勝てれば」と臨んだ第3ゲーム。昨秋メジャーとなり、関東トップクラス入りを果たした岡嶋選手がストライク、スペアを連発し、本学は勢いづく。スコアを着実に伸ばし、岡嶋選手は232ポイント、計924—897でこのゲームを収めた。

スポーツとしてのボウリングは、ただストライクを出すだけでなく、スコアの安定感も求められる。特に上級者のスコアがばらつくとチーム全体に影響が出やすい。今試合もこのことが原因で、最後まで実力を発揮できなかった。伊藤主将は「秋季リーグ戦までにチームとしての一体感を作り上げます。そして徐々に勝ち数を上げていき、1部リーグ内で存在感を強めていきたいです」と語った。

実際、今試合では第1ゲームでは100ポイント以上の差があったが、第2ゲームは差を縮め、第3ゲームでは逆転勝利した。秋には彼らが朗報を届けてくれるだろう。

（平峯さとみ）

力負けを喫す

バレー部女子

ブロックに跳ぶ加藤主将（左）

4月24日、本学体育館にて春季関東大学女子3部リーグ戦、第2試合目である対学芸大戦が行われた。本学は主力選手が3人引退し、さらにはレギュラーのひとりが怪我のために欠場と、ベストメンバーを組めない。今回の試合は厳しい状況で臨むこととなった。

試合前に加藤久枝主将（政4）は、「本学はレシーブ中心のチーム。相手の攻撃コースに早く対応して、後手にならないようにしていきたい」と語っていた。しかし、試合は思うようにはいかなかった。

第1セット、序盤は共に点を取り合うが、中盤以降レシーブが安定せず連続で失点。本学はタイムアウトで流れを変えようとするも、相手の勢いは止められない。最初のセットを15—25で奪われてしまった。

第2セットも始めこそ競るものの、徐々に引き離されていく。相手のスパイクが次々に決まるなか、本学の攻撃は相手の堅い守りの前に阻まれていた。このセットも13—25で落とし、もう後がない。

劣勢が続く本学。第3セットも波に乗れなかった。終始相手ペースのまま、一度も主導権を握ることなく13—25で試合は終了。セットカウント0—3でのストレート負けであった。

加藤主将はこの試合の敗因を「レシーブの穴を埋められなかったことです」と話してくれた。試合前の不安が的中するという結果になってしまったが、「この敗戦を引きずらず、気持ちを切り替えて次こそは勝ちたいです」と次戦への意欲もみせていた。

本学はこの後、3部上位校との試合も控えている。苦戦を強いられるかもしれないが、努力し続ければ、きっと彼女たちの顔には笑顔が戻るだろう。

（嶋先伸人）

TOPICS

その他の試合結果

【トライアスロン愛好会】▼カーフマンJAPANチャンピオンシップ▽5位世界戦出場権獲得

【馬術部】▼関東学生馬術新人競技大会▽M級障害6位入賞

【フィギュアスケート部】▼日本学生氷上競技選手権大会▽総合1位

【アイスホッケー部】▼第54回関東大学アイスホッケー選手権▽対東大6—0▽対筑波大3—6

【準硬式野球部】▼平成17年度春季リーグ戦▽対城西大8—6▽対帝京大6—2

【ヨット部】▼甲南大学定期戦▽優勝

【スカッシュ部男子】▼平成17年度全日本団体戦関東リーグ▽8位

【スカッシュ部女子】▼平成17年度全日本団体戦関東リーグ▽2位▼平成17年度全日本団体戦▽3位

デスクの片隅

一年の春、なにか部活に入ろうと思い、新聞社に入った。だが、特別新聞づくりに興味があったわけではない▼昨年、自分たちが上に立って仕事をするようになった。すると、いつの間にか歴代の先輩と同様、編集作業に自分なりのこだわりをもつようになった。なかでも、私が一番気をつけているのは写真指定だ▼どの写真を使えばよいのか。また、一枚の写真をどう切り抜いて読者に見せるのか。紙面では大きな写真も、原本は小さな小さな写真だったりする。そのため、指定の仕方ひとつでその印象は大きく変わってしまう。拡大しただけなのに、こんな写真だっただろうか、と首をかしげる事もしばしばある。写真指定は難しいのだ。だからこそ、紙面に印刷されたものが想像通りにできあがっていれば、一人静かにうなずいてしまう▼本来、こだわりなど自己満足そのものでしかない。だが、それが読者の記事を読む手伝いをするのだ。そう考えると、たとえ自己満足だとしてもこだわり甲斐があるというものではないだろうか。（果）